

イラン情勢でみられた戦い方や課題

防 衛 省
令 和 8 年 8 月

今般のイラン情勢における戦い方

今般のイラン情勢では、AIや無人機、宇宙・サイバー攻撃等を複雑に組み合わせた**新しい戦い方**に加え、イランによる地の利も活かした**非対称的な戦い方**が展開

- 米国・イスラエルは、大量のミサイル攻撃に、AI・無人機をはじめとする先端技術を組み合わせ、**圧倒的な軍事力**をもってイランに対する攻撃を実行。特に、**AI**により作戦効率が**飛躍的に向上**。
- イランもミサイルと大量の無人機で対抗。**国土の縦深性**や**ホルムズ海峡の閉鎖**といった手段も駆使しつつ、**非対称的な戦い方**を展開。**軍事的に優位な相手に抗戦を継続**。

01

無人機の大量運用



- ✓ 弾道・巡航ミサイルと大量の無人機を組み合わせた複合的・大規模な攻撃
- ✓ 無人機攻撃をはじめとする多様な攻撃に対応する防空能力の構築

02

AI等の先端技術活用



- ✓ AIを活用した迅速な情報処理・意思決定
- ✓ 宇宙・サイバー攻撃や電子戦の常態化
- ✓ 生成AIを活用した高度な認知戦が展開

03

継戦能力の確保・維持



- ✓ 強靱な生産基盤と十分な備蓄量の確保
- ✓ 柔軟な指揮統制の構築
- ✓ 同盟国・同志国等との協力の重要性

04

地の利を活かした戦い方



- ✓ 戦略的要衝のコントロールにより、軍事的に優位な相手にコストを賦課
- ✓ 国土の縦深性を効果的に活用した戦い方が展開

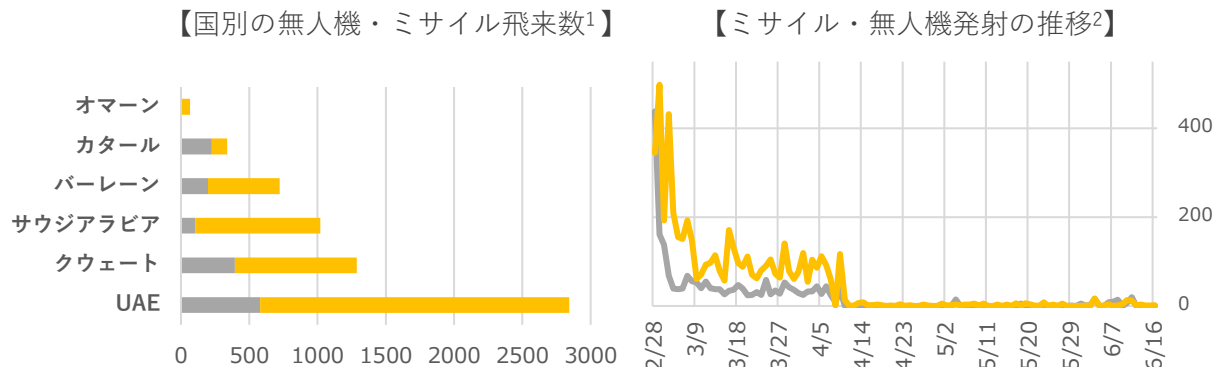
戦い方の特徴と課題① | 無人機の大量運用【1 / 2】

大量の無人機を用いた複合的な攻撃と対応手段の確立が課題に。

01 無人機の大量運用

✓イランは、**弾道・巡航ミサイルと大量の無人機を組み合わせた複合的な攻撃**を実施。
安価で短期間に大量生産可能な**無人機は、ウクライナ侵略と同様、戦場の主役に。**

イランによるミサイル・無人機攻撃（2026年2月28日～6月16日）



戦場では様々な用途の無人機が登場

Unmanned Aerial Vehicle

▼米軍の自爆型攻撃無人航空機（UAV）

「LUCAS」



(写真: DVIDS)

▼イランの「シャヘド」型UAV



(写真: アフロ)

✓米国は、イランが設計したシャヘド型の自爆型UAVをモデルに「LUCAS」を開発したと発表。

Low-cost Uncrewed Combat Attack System



(写真: Saronic Technologies社)

▲米軍が使用したSaronic Technologies社の自律型水上航走体（ASV）「Corsair」
Autonomous Surface Vehicle

▼米軍が機雷掃海活動に派遣した可能性が報道された無人水中航走体（UUV）

Unmanned Underwater Vehicle

「Knifefish」



(写真: DVIDS)

1. "Dashboard: Operation Roaring Lion." Institute for National Security Studies, <https://www.inss.org.il/publication/operation-roaring-lion-data/>.
2. "Iran Projectile Tracker." Jewish Institute for National Security of America, 18 June 2026, <https://www.jinsa.org/iran-projectile-tracker/>.

戦い方の特徴と課題① | 無人機の大量運用【2 / 2】

大量の無人機を用いた複合的な攻撃と対応手段の確立が課題に。

02 無人機・ミサイルへの対処手段の構築

✓ 高価な迎撃ミサイルの消耗軽減のための無人機への対処能力をはじめ、**相手からの攻撃の態様に合わせた防空能力の構築がより一層重要に。**

- 米国やイスラエル、湾岸諸国は、**安価な迎撃手段と高性能なアセットを組み合わせ**て対応。
- さらに湾岸諸国は、ウクライナから迎撃用無人機に関する技術提供を受けるとともに、共同生産等でも合意。

イスラエルの多層的な防空体制



アロー-3



アイアン・ドーム

無人機対処に使用される装備品の例

▼UAE国防省が公開したAH-64ヘリから無人機への攻撃



▼ウクライナ軍も使用している米国製のAI搭載小型迎撃無人機システム「MEROPS」



戦い方の特徴と課題② | AI等の先端技術活用【1 / 2】

AIをはじめとする先端技術の活用により、各種作戦の効果が飛躍的に上昇。

01 多領域を統合したネットワーク接続・データとAIの活用

✓ AI抜きに今後の安全保障は考えられない時代に。

- 米国・イスラエルは、AIにより迅速・的確な意思決定等を実現。

✓ AIの利点を最大限活用しつつ、意思決定には適切な人的関与を確保するプロセスの構築が重要。

02 宇宙・サイバー・電子戦の常態化

✓ 宇宙・サイバー・電子戦が当たり前の時代に。

これら領域の安定的な利用を確保する能力を強化し、攻撃前後の脅威への対処が重要。

- 米国・イスラエルは、攻撃開始前からイランに対し宇宙・サイバー領域における作戦を実施。
- これに対しイランは、さらなるサイバー攻撃を防ぐため、国内のインターネットを遮断したとの指摘。

メイブン・スマート・システム



米軍は、パランティア社の「メイブン・スマート・システム」を用い、目標選定から攻撃手段の指示・確認までを一連で処理し、迅速な攻撃を実現。

- 攻撃開始から24時間で約1,000目標を攻撃。従来は同数の目標攻撃に10倍の時間を要したとの指摘³。
- 他方、確認手順や情報精査の時間が短縮され、誤認・誤判断のリスクが高まるとの指摘や、入力データが不正確な場合、誤判断につながる可能性も。

▼「メイブン・スマート・システム」の画面



(写真: DVIDS)

戦い方の特徴と課題② | AI等の先端技術活用【2 / 2】

AIをはじめとする先端技術の活用により、作戦の効果が飛躍的に上昇。

03 認知戦の高度化

✓ 偽情報の見破りや分析、そして**迅速かつ適切な情報発信等を中心とする対応能力の強化が急務に。**

- 最初の攻撃後、生成AIによるフェイク映像が**SNS上で拡散。**
- 米国・イスラエルは**カウンター発信**を展開。

04 最新技術によるオールソース分析

✓ 質・量ともに豊かな情報と最新技術による、**迅速なオールソース分析**が、成果につながる。

- イスラエルの情報機関は、イラン国内の監視カメラ、SNS等から収集・蓄積した**膨大な情報をAIで処理・分析**し、イラン高官等を標的とした斬首作戦において、高官等の行動や居場所の特定につなげたとの指摘。

米国、イスラエル、イランによる認知戦が展開

Case 1 米空母がイランによる攻撃を受けたとするフェイク動画

米空母への攻撃（フェイク）▼



米中央軍は、英語、ペルシャ語、アラビア語を含む複数言語※のXアカウントからカウンター発信
※上記ほか、米中央軍は、ロシア語、中国語、トルコ語、バシュート語、ダリ語、ヘブライ語、ウルドゥー語の計10言語のXアカウントを保有

Case 2 ネタニヤフ首相が亡命・死亡したとするフェイク画像・動画

▼亡命先から徹底抗戦を呼びかけ（フェイク）



▲「ネタニヤフ首相は実は死亡しており、右手の指が6本ある映像内の同首相は虚像である。」という偽情報を拡散

▼指は5本とネタニヤフ首相が強調



ネタニヤフ首相の生存を首相府が投稿▲

戦い方の特徴と課題③ | 継戦能力の確保・維持【1 / 2】

持続的に守り抜く能力の重要性が浮き彫りに。

強靱な生産基盤・備蓄の確保の必要性

✓ 平素から十分な備蓄と生産力を確保・維持しつつ、
万一の場合にはさらに急速に生産を拡大できるようにしておくことが重要。

- イランは長年にわたり**自国の無人機産業の発展**に注力。
イラン軍高官は、2025年6月の米国・イスラエル攻撃以降、無人機の生産拠点を**小規模化・分散化**し、生産量を**10倍**にしたと発言。
- 米国は、短期間に迎撃ミサイル等を大量に消費し、
在庫数の回復には数年間を要するとの指摘。
一方で、米国政府はこうした指摘を否定。
- 米国政府は、防衛関連企業と**ミサイルの生産増加**に向けた枠組み合意に署名。

今次作戦での米国の弾薬消費量等に関する分析

※米国のシンクタンク戦略国際問題研究所（CSIS）による分析

	イラン攻撃前の保有数	イラン攻撃で使用された推定数 (対攻撃前保有数比※2)	生産能力 現在の年間最大生産量 (枠組み合意上の目標値)	攻撃前の水準への 回復見込み時期
トマホーク	3,100	1,000以上 (32%以上)	600 (1,000)	2030年後半～ 2031年前半
THAAD	452	174-218 (38～48%)	96 (400)	2029年中旬～ 後半
ペトリオット	2,330	1,503～1,571 (65～67%)	2,000 (2,000)	2029年中旬
SM-3	410	130～250 (32～61%)	156 (250)	2029年前半
SM-6	1,160	190～370 (16～32%)	239 (500)	2028年後半～ 2029年前半
JASSM	4,400	1,100以上 (25%以上)	860※1	2027年中旬
PrSM	90	40～70 (44～78%)	680 (550)	2026年後半

※1 JASSMに関しては、目標数が示されていない。

※2 「対攻撃前保有数比」は、「イラン攻撃前の保有数」と「イラン攻撃で使用された推定数」をもとに、防衛省において機械的に算出。

4. Cancian, Mark F., and Chris H. Park. "Rebuilding U.S. Missile Inventory: A Multiyear Project." CSIS, 27 May 2026, <http://www.csis.org/analysis/rebuilding-us-missile-inventory-multiyear-project>.
5. Cancian, Mark F., and Chris H. Park. "Last Rounds? Status of Key Munitions at the Iran War Ceasefire." CSIS, 21 April 2026, <http://www.csis.org/analysis/last-rounds-status-key-munitions-iran-war-ceasefire>.
6. Cancian, Mark F., and Chris H. Park. "Renewed Iran War Would Test Diminished Interceptor Inventories." CSIS, 27 July 2026, <https://www.csis.org/analysis/renewed-iran-war-would-test-diminished-interceptor-inventories>.

戦い方の特徴と課題③ | 継戦能力の確保・維持【2 / 2】

持続的に守り抜く能力の重要性が浮き彫りに。

同盟国・同志国等との装備・技術協力

- ✓ 同盟国・同志国との装備品の共通化や共同生産などの装備・技術協力により、海外での生産・整備基盤やサプライチェーンを強化し、**有事の際の相手国からの逆輸入・提供などの支援確保**につなげることが重要。

湾岸諸国

高価な迎撃ミサイルを消耗。**同盟国・同志国**は、**装備品の派遣・供与等により支援**。

イラン

ロシア製の無人機の使用や、**中国からの部品調達**の可能性についての指摘。

湾岸諸国への支援の例（各国発表や報道）



※1 米国の装備品については、FMS契約を進めることが承認されている。
※2 韓国とUAEとの間で防空システム「天弓-II」用弾薬の早期納入を協議。

戦い方の特徴と課題④ | 地の利を活かした戦い方

自国の地の利を最大限活用し、相手の軍事的な質・量の優位を相殺する戦い方が重要。

01

戦略的要衝のコントロールにより、軍事的に優位な相手に抗戦

✓ シーレーンの武器化は**現実の脅威**に。

また、個別の戦闘や作戦における勝利は、戦争全体の勝利に必ずしもつながらず。

- イランは、機雷敷設の示唆等により、ホルムズ海峡を実質的に閉鎖。**米国内世論や国際社会を巻き込み米国に圧力。**
- **地の利を活用**し、軍事的に優位な相手に対し、比較的少ない軍事コストで**耐えがたいコスト**を賦課。

北にアルボルズ山脈、南西にザグロス山脈があり、自然の防護壁として機能

02

国土の縦深性を活用

✓ 相手からの攻撃を耐え抜く、**国土の特徴も踏まえた重層的な防衛態勢**の構築が重要に。

- イランは山脈等の**自然の防護壁を効果的に活用**。ミサイル施設等は山岳地帯や地下等、**隠蔽性・生存性の高い場所**に分散して所在。

ホルムズ海峡

- ・ 世界の原油・LNG等の約20%が通過
- ・ 水深により海峡内で船舶が航行可能な航路は往復各方向とも幅約3 km

イランによる機雷敷設

- ・ 2026年6月現在、海峡内に**約80個の機雷**が敷設されている可能性⁷

“イランはホルムズ海峡を閉鎖するという手段を用いるべきである。同海峡は「敵が極めて脆弱な地域」だ。”

(2026.3.イラン国営放送で発表された声明)

モジタバ師



今般のイラン情勢でみられた戦い方の特徴と課題

無人機の大量運用やAI、宇宙・サイバー・電子戦、認知戦等を組み合わせた「新しい戦い方」は、
今や**世界のスタンダードに**。今般のイラン情勢では、こうした「新しい戦い方」が**更に洗練された形で**展開。

- 01 AI等の先端技術の活用により、作戦全体の効果が向上。 
戦闘全体のテンポが大幅に加速する中、相手方に意思決定で劣後せず、また日米連携の実効性も確保できるよう、AIの活用を推進していくことが重要。
- 02 戦闘効率の向上や大量のミサイル・無人機への対処により、戦闘の早い段階から弾薬等が大量消費される現実が明らかに。 
同盟国・同志国との協力などにより、平素からの十分な装備品の備蓄と生産力の確保、万一の場合の急速な生産拡大が可能な態勢構築が重要。
- 03 認知戦の高度化により、国際世論・相手国の国内世論を揺さぶり、戦局を左右させる試みが深刻化。   
平素から政府横断・官民一体となった認知戦対処能力を強化するとともに、自らのナラティブ発信能力を向上させることが重要。

同時に、先端技術の活用による新しい戦い方が展開される現代においても、古くから重要性が指摘されてきた**普遍的な戦い方**も引き続き有効であることが明らかに。

- 04 「地の利」を活用することで、軍事的に優位な相手に対しても大きなコスト賦課が可能に。 
シーレーンや海洋上の要衝のコントロールといった脅威への対処能力の強化、四方を海に囲まれた地理的特性を活用した戦い方への対応が重要。
- 05 指揮系統や運用・補給基盤に損害を受けても、作戦を継続できる分散・冗長化・迅速復旧能力の重要性が明らかに。 
生産基盤の分散・冗長化や指揮統制の柔軟化等により、抗戦を継続できる態勢を平素から構築しておくことが重要。

- ✓ 我が国としても、これらの特徴と課題を踏まえ、新たな技術や普遍的な手段の活用により、相手に対し優位なコスト構造の下で効果的に脅威に対処し、「**新しい戦い方**」に対応していくことが不可欠。
- ✓ 戦略的要衝の閉鎖が国際社会全体に**甚大な経済的影響**を及ぼすことが浮き彫りになる中、我が国の**防衛力強化**に加えて**同盟国・同志国連携の更なる強化**がより一層重要。